

徳永直の会会報
第57号

新星、和田氏入会

会長 高木 陽助

光陰矢の如し。四月二十四日の午後から総会、夕方から「出版文化賞」受賞を祝う会、と慌ただしく行事を開催してから既に八ヶ月。この間、会報五十六号を発刊、送付。小・中学生対象の読書感想文を募集するために、「徳永直文学選集」から、『こんにやく売り』と『最初の記憶』の抜き刷り集「徳永直作品集Ⅰ」を作成し、主に熊本市内の小・中学校に募集をかけたが、応募学校はゼロ。見事に失敗。かろうじて、勤務校の高校生が何編か提出してくれた。今後の対応策を検討する必要がある。定期的に「読書会」も目論んでいたが、こちらも七月二十四日の第一回で頓挫。ただ七月、菊陽町図書館で開かれた企画展「少女雑誌にみる郷土ゆかりの作家たち」で、徳永直の小説『小さい記録』が少女雑誌に載っ



「少女の友」新年号

目次

「新星、和田氏入会」	徳永直文学散歩……………4
高木陽助……………1	第二十三回「孟宗忌」写真…5
「労働の価値」が意味するもの	会計報告・第二十四回「孟宗忌」
和田 崇……………2	案内・編集後記……………6

ていることが分かったのは大きな収穫であった。手元の年譜（津田孝氏作成）を調べてみたが触れられていない。同館臨時職員村崎修三さんの許可を受けてコピーさせてもらった。製本化し、会報と共に送付する予定である。娘さんの火傷にからむ内容であるが、会員の皆さんにも是非読んでいただきたい。

一番大きな収穫は、立命館大学大学院博士後期課程の和田崇氏が入会してくれたことである。「徳永直の会」も高齢化が進み、会費納入会員五十名弱の中にあつて、二十代の徳永直研究者の入会は嬉しくてたまらない。自己紹介を兼ねて昨年十二月に発行された、立命館大学日本文学会の「論究日本文学第九十一号」に掲載された論文『労働の価値』が意味するもの——徳永直の転向作品と生産文学——の本論以降は次号に譲り、「はじめに」の部分を紹介する。

昭和十七年八月発行『をさない記憶』の「まえがき」は次のような言葉で始まっている。

偉大なる大東亜戦争が進行してをり、わが皇軍は海のかなたで日夜戦つてゐる。これはまさに世界的な聖戦である。
「偉大なる大東亜戦争」・「世界的な聖戦」という言葉だけを聞く

と、徳永直は昭和九年以降すっかり「転向」してしまっていたのではと思われるが、和田氏は「文学的非転向」を自負し、内的意識の中で転向を回避することができた、と言うのである。本論も楽しみであるが、紙幅の都合で次号に回さざるを得ない。

十一月に岩波書店から発行された『新・日本文壇史』―第四巻プロレタリア文学の人々―の帯には徳永直たちの「生の実相を描きだす」とある。どのように描かれているか興味深い。この冬読んでみたい。

毎年、一月発行（予定）の会報には会員の「徳永直に関する」論文、エッセイ等も載せてゆきたいと思っている。会員の皆さんの積極的な応募を期待する次第である。

「労働の価値」が意味するもの

―徳永直の転向作品と生産文学―

和田 崇



はじめに

徳永直は、「自作年譜」〔昭和文学全集6〕角川書店 一九五三・一（昭和九年（1934）三十五歳）の項に、次のように記している。

短編『冬枯れ』―日本プロレタリア作家同盟解散直後で、反動の波の中に腰をすえる場所を求めてくるしんだ。そしてこの短編後も、容易に出口がみつからず三年ばかりのあいだ、殆んど作をかいていない。

日本プロレタリア作家同盟（以下「作家同盟」と略す）の解散は一九三四年のはじめ、短編小説『冬枯れ』は徳永の転向作品とされ、同年の一二月に『中央公論』へ発表された。確かに徳永の言う「三年ばかりのあいだ」、つまり一九三四年から三七年にかけて、彼はあまり目ぼしい作品を書いていない。しかし、「三年ばかり」が経過した後、徳永は実に多くの作品を著していく。単純な統計を持ち出せば、徳永が一九二九年―二月にデビュー作『太陽のない街』（戦旗社）を刊行してから、作家同盟解散後の一九三四年四月に刊行された『新しき出発』（ナウカ社）まで、十一の単行本を刊行しているのに対し、彼が「出口」を見つけ、創作の軌道に乗り出したとみられる一九三八年―一月の『はたらく一家』（三和書房）の刊行から、右と同じく五年間に刊行された単行本を数えると、その数は十六である。（いずれも再刊行や共著を除く）。もちろん、作家同盟という被弾圧組織に所属していた頃と比べて単行本の刊行が容易になったことが原因の一つであることは当然だが、それでも、仮に徳永が終戦までに終始苦悩の日々を送ったのであれば、これほど多い著作は刊行できなかったであろう。つまり、徳永の創作意欲は、作家同盟の頃よりもむしろ、その脱退後、いわゆる「転向期」に熱く焚きつけられたのである。

徳永が転向期に旺盛な創作意欲を示したことについて、商業ジャー

ナリズムの波に乗せられたという批判が可能であるし、逆に作家としてもを書く立場を貫いたという評価も可能であろう。今、私はその善悪を明確に答えることはできないが、少なくとも、徳永がどうしてそれだけの作品を書くことができたのかを明らかにする必要はある。そして、結論から先に述べてしまえば、それは、転向期においても、徳永の内的意識の中では「非転向」が貫かれていたからである。

一九三四年一月四日および六日の『読売新聞』に徳永が発表した「転向作家とは何ぞや」は、彼の転向に対する考えが如実に表れている。この中で徳永は「『転向作家』とは、政治活動において転向した人のことの謂なのかそれとも文学活動において転向した人のことを謂ふのか」それが不明確であるとして、次のように転向作家について述べている。

ぼくらが「転向作家」であるか、ないかを区別しうるのは、彼の文学以前、理論以前ではなく、彼の「作品」ないしは「文学理論」において、それが反プロレタリア的なるものであるか、またそうでないかのみによって識別されるのである。(中略) 多くの「転向作家」批判者たちは、最後の切札に「小林多喜二」を担ぎ出すことを忘れない。そして彼以外はすべて「転向作家」だときめてかゝろうとする。勿論小林は政治的实践にも転向しなかった。しかしだからといって、他の作家たちは皆転向作家だといふことにはならない、政治的に云つてもそんな単純なものではない。

徳永の念頭に、板垣直子の「文学の新動向」(『行動』一九三四・九)をはじめとするプロレタリア作家の政治的節操を問題とする転向論、それへの批判があつたことは間違いない。徳永が小説を書いていくためには、明確に政治的实践と文学活動とを区別する必要があつた。また、翌年一月の『文学評論』誌上に掲載された「新人座談会」においても、徳永は「現在ブルジョア作家達が攻撃するのは、政治的転向も文学的転向も一緒たにして攻撃する」として、「作家として考へた場合、少なくとも文学的に転向したか否かにある」と発言し、前掲の考えを繰り返している。

判沢弘は、徳永の転向が、「大衆文学形式」の提唱、作家同盟の脱退、「冬枯れ」の発表というように次第に傾斜し、「一九三七年(昭和十二年)の『太陽のない街』絶版宣言によって彼の屈服は定まった」としているが、この流れは正しく徳永の変遷を捉えているといえよう。ただし、『太陽のない街』絶版宣言が完全な転向と位置付けられるのは確かだが、それまでの過程において、徳永自身がどれだけ転向への傾斜を自覚していたのであろうか。今日、客観的に見ればそれを転向と呼ぶことは容易である。しかし、ここで問題としたのは、徳永の中に、自らが転向しているという意識が果たして存在していたのかどうかということである。

徳永のような意識構造に関して、森山重雄の『文学としての革命と転向』(三三書房一九七七・二)における秀逸な分析があるのでこれを引用したい。森山は、「転向は過去において非転向軸を中心に価値づけられてきたために、屈辱を伴つたのではないか。非転向を唯一最高のものとみ、その非転向の価値軸によって、日本の運動史を捉えるならば、どうしても転向は屈辱的なものにならざるをえ

ない。これが正統的な共産主義者の側からみた転向の位置づけ（無価値づけ）であった」とした上で、次のように転向者の心理を論じる。

それが転向者の側からの非転向軸の価値観である点で、どうしてもそこに自己撞着が起き易い。例えば理想と現実の乖離——理想は非転向にあるのだが、現実には転向せざるをえないといった矛盾が起きる。ここから及びがたい理想に対して、自己の生活は第二義的なものと観じざるをえない結果が生まれる。第一義の道は失われているけれど、せめて非転向を理想と仰ぐことによつて、第二義的な道を選ぶ自己を弱々しく肯定するのである。もつとも同じ非転向を理想とする側でも、理想と現実の乖離に直面して、自己肯定の道を選ぶか自己否定の道を選ぶかによつて二つに分れる。また自己肯定のようにみえながら、実は自己否定であり、自己否定のようにみえながら、実は自己肯定であるといった細かい変奏曲もありうる。

徳永の転向への解釈をこれに当てはめるならば、小林多喜二の死を頂点とする「非転向軸」による転向論を、「政治的転向」と一蹴することによつて、自らの政治的実践における転向を文学における思想的非転向に置換して肯定したことになる。徳永は、ともすると「ひらきなおし」とも見える「文学的非転向」をかざすことによつて、権力者やブルジョワ文壇側の創出した転向論を否定したので。では、徳永はどのようにして文学的非転向を自負し、内的意識の

中で転向を回避することができたのだろうか。以下、本論ではこの問題について考えていきたい。

—以上「はじめに」による

徳永直文学散歩②

緒方 宏章

まだ御幸橋の袂に公会堂が出来ていないころの事だった。ある夏の宵、私たちは田舟を漕いで坪井川をくだっていた。みんな十五六歳の少年ばかりが五六人、市内に入るにつれて新市街へんの明るい灯が見え、うきうきしながら、竿で船べりをたたいたり、明笛やハモニカを吹き鳴らしたりする。舟はゆるい水に従ってひとりりで流れるし、私たちは幸福な瞬間だった。『洗馬橋附近』より）

寺原町付近で田舟を借り、八景水谷まで漕ぎ上り、大きな牛蛸を捕まえて、「洗馬橋のお虎さん」に献上しに行く少年たちの、ある日の出来事である。「熊本朝市」の裏通り、熊検番のある裏小路の、ある寿司屋の娘が「洗馬橋のお虎さん」であった。今ではその場所は、はつきりとはしないが、この近辺には、まだまだ昔の面影が残っている。



洗馬橋より下流を望む



<第33回 孟宗忌 碑前祭記念写真>



河原畑前館長



中村青史先生



森永浩子氏



朗読風景
池田義一氏



原武博之氏



池田さとみ氏



『他人の中』を読む
矢部絹子氏



石岡まゆみ氏

2010年度(4月～12月)会計報告

収 入		支 出	
前年度繰越金	95,312	作品集I印刷代	85,000
会費(44人)	88,000	総会費・その他	9,968
祝賀会残金	79,980		
収 入 合 計	263,292	支 出 合 計	94,968
		残 高	168,324

- * 2010年度の会計報告は、総会時に行います。
- * 2011年度会費(2,000円)の納入をお願いします。
「孟宗忌」の当日及び「総会」当日に、会費の徴収も行います。
または、「総会」後に振替用紙を送付しますので、お振込みください。
- * 住所変更等がありましたら、下記までご連絡ください。

〒862-0955 熊本市神水本町6-40

緒方 宏章

TEL 096-381-9002

第三十四回 孟宗忌のご案内

日時…平成二十三年二月十三日(日)

①午前11時～午前11時半 徳永直文学碑前

(立田山登山口、泰勝寺入口)

・ 献酒、献花。経過報告。

②午後2時半～午後4時半 熊本近代文学館ロビー

・ 朗読・講演(講師…和田 崇氏)

③午後5時半～午後7時半 懇親会(水前寺十徳や)

(会費二千五百円…当日受付)

編集後記

▽「徳永直読書感想文」の募集をしましたが、多くの方からの応募を得ることができませんでした。次回こそはと思っています。皆様のご協力をお願いします。

▽会報を作成するのに、余裕を持って当たろうと準備をしましたが、時間の経つのは早いもので、あつという間に締め切りが迫っていました。今回も会員の皆様には、満足のいく会報が出来たのかと心配しております。

▽新規会員を増やすためのアイデアを募集しています。ご協力をお願いします。

▽会員の皆様のご意見・ご感想を、お待ちしております。

(文責…緒方宏章)